



書首

源氏物語

十松八風





十八

河巻名 身と加へて独りどろ古きまきりかす松をせそ極
花詞并以哥爲巻名ほ氏三十歳のみあり繪合乃同年也
細原氏卅歳秋るんよりとより繪合巻をうり年のみあり

○東の院 花し女巻よ六条院いつつろり
とまよ二条の東院と作て花散里らうら
は六条院作出て後花散里らうら
は明石上いぬいの町とまよら此東院よ六空
蟬未摘らう始終に残らありはる也
弄 蓬生巻の未らうつろらうら
○まらら或は 政所家司 東院のまら取
とらら諸役者也
○ひんぐのたいは 細明石上とまよら

○うらそと 或は 空野未摘らうのまら

ひんぐのあんはらうそら花散
らうららえしうららら
あらのまらららららららら
まららららららららららら
あらのまらららららららら
らららららららららららら
らららららららららららら
らららららららららららら
らららららららららららら
らららららららららららら
らららららららららららら

○とんてんハ河礼記曰聘則為妻奔則為妾
 聘ハ以礼也奔ハ無媒也野合之類也されハ
 紫上ハ猶妾の云々仍寢殿は居せらるる
 花 河海の説やまわり紫上ハりとも二条院
 の西御は住みたり東院の寢殿と源氏の御やす
 るは心めて居ゆへはゆきと居らんとさやう
 わりといひる也 細花鳥ハ河海の誤と誤る由
 ろつら然とも河海説可然と其故ハ六条院と
 と寢殿ハ紫上と置ゆへはり也聊心有とるが
 ○あつはハ 孟これより明石の事也

○やじとるま 細源氏のまひゆかぢま
 とく 巴抄やじとるまのまひゆかぢ
 時ハとるまのまひゆかぢとるまのまひ
 とるま

○此若きとる 万水 明石姫君の事也
 ○おちしてゆせは 河のせとと老もこれハ世春
 ハ花のかりととゆせは也

○きあつふ 万水 源氏のまねくまはりゆかぢ
 とまらるるまのまねくまはりゆかぢ
 の浦ハ姫君のまひゆかぢのまねくまはり
 ゆかぢとるまのまねくまはり也

○ひつとるま 巴抄 若君のつ井のかりゆ
 ととるまのまねくまはり也

○ひう母君の 河前中書王兼明ととるま
 号小若官 菟裘賦云余龜山之下聊卜幽

〇とんてんハ河礼記曰聘則為妻奔則為妾
 聘ハ以礼也奔ハ無媒也野合之類也されハ
 紫上ハ猶妾の云々仍寢殿は居せらるる
 花 河海の説やまわり紫上ハりとも二条院
 の西御は住みたり東院の寢殿と源氏の御やす
 るは心めて居ゆへはゆきと居らんとさやう
 わりといひる也 細花鳥ハ河海の誤と誤る由
 ろつら然とも河海説可然と其故ハ六条院と
 と寢殿ハ紫上と置ゆへはり也聊心有とるが
 ○あつはハ 孟これより明石の事也

〇やじとるま 細源氏のまひゆかぢま
 とく 巴抄やじとるまのまひゆかぢ
 時ハとるまのまひゆかぢとるまのまひ
 とるま

○君もつらう 或は下母君の心也

○年々ふ細明石尼の心也年々ふひいろ
庵の中も入道はあうし物と母時明石
上よつそのあつてはとひいさうり也

○うあはよ細くしつら中に入つてせは
ううしと物と也

○らんれをわけて花をるれ本水よりわら
本とみするせ本といふ

○安藤芳三郎の本のまわてむとこまのまか
さうすもあひ又そくさるるれ本磯馴
より心るうし

○そそひうら細入道よりてわうの佳の
とやをさう

○是らハ世と細世極そそ母りうとと
と終(き)とあひいよるまをさうれ出まら
よとらう

○ありとぬ河古今ありとそ余まらる程
はううさるまきくもさうとらう

○うらさくハ細若き人ハ何心するの
かあさうとらうら也
或は世房ととの心也都(の)あつたわら
とと世浦とらうらとらう

○うらうはよ 或は何事よむととの心也

○うの目とあつ万水ぬのありれ目の曉也

○虫乃きを万水様とらわつるわわわ
しとる也ハ秋風の海とよ虫のうらわ
ことやうとらうとらう

○例のそより 或は例の後夜行法の時
分よりともなく起らる也

はうらうとらうらうのうら
しとらうもさうらわらわら

うらうらとらうらうらうらう
うらうらとらうらうらうらう

ハ又子と云ふ道といフ
河富貴不帰故郷如衣錦夜行史記朱買臣傳
案之此心尚不叶と可勘

○佛神と細住言ふといふこととせし也

○身ひよりりて細住成る事也

○中く身のやとを細ゆ未いといふ也

○心も清よ万水 姫君の此清よおせん冥
加るこころ也

○天も清よ万水 或按 姫君と云ふはあまの
とまきれとのあり給とてはるはあまの也

○此乃ハ万水 入道我れとていふ

○まきこころハ 弄 入道瑞夢れとていふ

○心も山より乃万水 入道心とていふ
うよせれ給る芳うと也

○天よせんハ 河天人墮三途事也 勘又天上の
樂きて帰三途心也と云 案之此義前後より
都(帰)と三途とて天上よ生よとて(乃)を明
浦の隠居(程)と三途の二時といふや天より
つと三途よ墮事とていふ今れ祝の折席頗
不便を如何案之天よ生せんとて先三途よ墮を
弄 天人のよりハ此界をいふとて又天よ帰
るありとのたといふ也 正法念經云天上欲退時
心生大苦惱地獄諸苦毒十六不及一又經云果報
若盡還墮三途 花地獄餓鬼畜生と三途

Handwritten text in cursive style, likely a transcription of the text on the left page.

Handwritten text in cursive style, likely a transcription of the text on the left page.

○うろくろき 細花鳥祝如何ほ氏の心業
上の心との同くねやうまうまも
○いづの有友 細ほ氏の心業
いづのやうまはるく人といひなむ
也花鳥の祝如何

○山せうくまハ 万水 山供の心業
ねね也てし濁し

○うろろろろ 細ほ氏の明石をせつと
時ふ類をうろ也 万水 明石上の心也

○心のやえと 或樹子とく心のやえと
但姫君とく明石上の心也
めつろく 細ほ氏の心也

○大のりれきえ 細夕霧也
巴掛夕霧とくむろハ太政大臣の孫の心也

○山口ハ河 或説云伊勢造官山口祭事元
人よりとどのかきろ 君とれハハ山口とく有
花山口ハ山入の初と云也伊勢造官のあんと
て十月ハ山口祭有されと拙人の始といふ又鷹
狩といふおの始と山口とくハ云とく可成
人ハおのりれきえ時より又ゆた人と也

うろくろき 細花鳥祝如何ほ氏の心業
上の心との同くねやうまうまも
いづの有友 細ほ氏の心業
いづのやうまはるく人といひなむ
也花鳥の祝如何
山せうくまハ 万水 山供の心業
ねね也てし濁し
うろろろろ 細ほ氏の明石をせつと
時ふ類をうろ也 万水 明石上の心也
心のやえと 或樹子とく心のやえと
但姫君とく明石上の心也
めつろく 細ほ氏の心也
大のりれきえ 細夕霧也
巴掛夕霧とくむろハ太政大臣の孫の心也

うろくろき 細花鳥祝如何ほ氏の心業
上の心との同くねやうまうまも
いづの有友 細ほ氏の心業
いづのやうまはるく人といひなむ
也花鳥の祝如何
山せうくまハ 万水 山供の心業
ねね也てし濁し
うろろろろ 細ほ氏の明石をせつと
時ふ類をうろ也 万水 明石上の心也
心のやえと 或樹子とく心のやえと
但姫君とく明石上の心也
めつろく 細ほ氏の心也
大のりれきえ 細夕霧也
巴掛夕霧とくむろハ太政大臣の孫の心也

○今もさるる細わんころのほろり

○あし磯をよ細地屋のうりりまてかみし
りりしと也河入るこわろわりのほま神
ちりてさるまめいろいさるういさる

○二葉の松 或按 姫君の事也
河千世んと祝ひまめて一姫の松根さるめ
て一岩のまるとす

○あしきねさー 花は八明石の姫君の母を
浸る根さーと早下て尼君のいつ也さー
あしりりさるきねと云心也

○アとの住ぬひきろ花 兼明親王天延三年八
月十三日龜山に祈水祭文あり後の世まて小
倉の麓は萱の中其水は流有申或記は流り
弁申務官は流るれ其まを物語申出流り
尼公の流きねさーゆやると早下の約とる
さめ心て彼親王のまの流也母也
うとくまー 弄水の音と也いとくまー

○住ちれさ細 尼君の言也我が昔あ
ちりともとれ果ると也水の声はう
じうろまると也

○んやひふ 弄水 尼君のま子細と也

○さる井の河小 日本紀小井也と也
のさるまると也

○細まのまれ亦二句と也

○せよちす 万水 尼君のなめると心也

○山寺に 弄 嵯峨の山堂の事也

○花 樓霞寺の事也

○月 毎乃 河 十四日 普賢 十五日 阿弥陀

○晦日 教迦 念佛 常行 三昧也

○細 佛の縁日ともといふ末の初は月三度ハ
うりれ山奥也とあり此法事れきりりりり
ぬるる

あしきねさー花は八明石の姫君の母を
浸る根さーと早下て尼君のいつ也さー
あしりりさるきねと云心也
アとの住ぬひきろ花 兼明親王天延三年八
月十三日龜山に祈水祭文あり後の世まて小
倉の麓は萱の中其水は流有申或記は流り
弁申務官は流るれ其まを物語申出流り
尼公の流きねさーゆやると早下の約とる
さめ心て彼親王のまの流也母也
うとくまー 弄水の音と也いとくまー

あしきねさー花は八明石の姫君の母を
浸る根さーと早下て尼君のいつ也さー
あしりりさるきねと云心也
アとの住ぬひきろ花 兼明親王天延三年八
月十三日龜山に祈水祭文あり後の世まて小
倉の麓は萱の中其水は流有申或記は流り
弁申務官は流るれ其まを物語申出流り
尼公の流きねさーゆやると早下の約とる
さめ心て彼親王のまの流也母也
うとくまー 弄水の音と也いとくまー

○わくわく河以煙文人くくあかせうし心也
或披をれくの役人よ被作付也あかせう
ハ被謀也

○月のあつこは花大井の里よ帰路也

○ありよ乃多 弄 明石よて思よふし
ひしよ也

○のまねれと 細よの宿よ玉ぬひし琴也

○まこちへと弄 今のやよあかしは明石
巻よいねうりぬかとようりともを弄り
ぬし時のよ也

○契りよは哥 花 明石巻よ昔音たうぬ
さきよ必あひんんと共君よ契りぬし
うりぬよのちよといふは久くも也

くさくさむらさきおのれむらさき
めさくせぬむらさきのむらさきの
ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき
のあつこは花大井の里よ帰路也
ししがいでうりぬかとようりともを
ぬきぬきのぬきぬきぬきぬきぬき
かこちへとあかせうし心也
ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき
もろもろむらさきぬきぬきぬきぬき
うりぬよのちよといふは久くも也
契りよは哥花明石巻よ昔音たうぬ
さきよ必あひんんと共君よ契りぬし
うりぬよのちよといふは久くも也

○うりぬよのちよといふは久くも也
さきよ必あひんんと共君よ契りぬし
うりぬよのちよといふは久くも也

巴枘 我身の定るごとくころ心山皇の祈

○もをさうぬ 細 ほ氏のわ傍よともあふ
さうやうよなること也花の涙如何

○がよわさうぬ 花 播磨守の女よともあふ
とあふぬがよわさうぬ有る有るといふ

○若きころり 細 姫君のよ也

○いふせう 細 ほ氏の心也

孟くの大井の里よて此姫君とやいふは
あつこ也

○二条院よ 細 紫上の養子よ一は
あつこ也

えんよ
うりぬよのちよといふは久くも也
さきよ必あひんんと共君よ契りぬし
うりぬよのちよといふは久くも也
ぬきぬきのぬきぬきぬきぬきぬき
かこちへとあかせうし心也
ぬきぬきぬきぬきぬきぬきぬき
もろもろむらさきぬきぬきぬきぬき
うりぬよのちよといふは久くも也
契りよは哥花明石巻よ昔音たうぬ
さきよ必あひんんと共君よ契りぬし
うりぬよのちよといふは久くも也

○ひと里遠しや河里遠三ひうよせよとうか
のこへちりしとらふひいひううん元真集
○うらふよと花はううの乳母の乳也
孟明石い入あつ時ううの味意のやうよてい
つひよとド也

○つひかねて万水ほ氏のゆき

○あやう万水ほ氏のゆきとていんせす
いんせういんと也

○とらうとよ細明石上のゆき也

巴抄いつし句ちと

○んせらと或抄ちとていんせす

○うちうひて細乳母也

○中くちひ万水明石上のゆき也

いんせういんと也
あやう万水ほ氏のゆきとていんせす
いんせういんと也
とらうとよ細明石上のゆき也
んせらと或抄ちとていんせす
うちうひて細乳母也
中くちひ万水明石上のゆき也

○わかう上ずりう万水ほ氏のゆき上龍り
いんせうとていんせ也 或抄明石上のゆきとていんせ
あやうとていんせ也

○んくそ 或抄 乳母其外のち房もせり也

○ホ丁よつと或抄 へいんせとていんせ也

○んせらとていんせ 細明石上也

○んせらとていんせ 万水明石上の親玉とい
んせらと不足る事とほ氏のゆき也

○んせらとていんせ 細明石上のゆき也

○んせらとていんせ 巴抄ほ氏の神明石とい
んせらと不足る事と今今のゆき也

わかう上ずりう万水ほ氏のゆき上龍り
いんせうとていんせ也 或抄明石上のゆきとていんせ
あやうとていんせ也
んくそ 或抄 乳母其外のち房もせり也
ホ丁よつと或抄 へいんせとていんせ也
んせらとていんせ 細明石上也
んせらとていんせ 万水明石上の親玉とい
んせらと不足る事とほ氏のゆき也
んせらとていんせ 細明石上のゆき也
んせらとていんせ 巴抄ほ氏の神明石とい
んせらと不足る事と今今のゆき也

次の詞は又く

○中よあひしるこ 河久々の中よあひしる 雲の
光とのまはりのむすしる 舞勢
かのあはらちと河津路よあひしるふ
月目のちかきこひのあひしる
細明石よあひしるをよしるも也

○花のしらけり 細 草子地也

○わたりきて 花明石よあひしる 浅海の湯
の表えし湯衣のしらけり (うきよまてそはの
湯のあはしる) 月とこひとけり也
弄 あはしるのしらけりやうき心也
或柳 あはしるのしらけりやうき心也
淡の心をしらけり
○うきまよき 細 明石よあひしる 浅海
は雲のしらけり也 祝してあり

○右大弁 細 誰ととる 花鳥河海とやうき
ふむ可然也

○雲の上乃秀 細 草原さ霞の谷まをうし
の心あり老くるれい古院のやうき心也
心よ 細 草子地也

○まらちり 或柳 まらちり心也

○このえと 或柳 玉室古事也
河古ことハアキもわろくえのえのち
とちかきこひのあひしる 細 此上の前代詞
このえとわろくあはれんかしや侍とよと

して物なまもよわらぬ
行舟まらちりあはれ
あはれ 中よあひしる
あはれ 月目のちかき
あはれ 細明石よあひ
あはれ 花鳥河海とや
あはれ 雲の上乃秀
あはれ 右大弁ととる
あはれ 心よ 細
あはれ まらちり

あはれ 花鳥河海とやうき
あはれ 雲の上乃秀
あはれ 右大弁ととる
あはれ 心よ 細
あはれ まらちり
あはれ 花鳥河海とやうき
あはれ 雲の上乃秀
あはれ 右大弁ととる
あはれ 心よ 細
あはれ まらちり

ひききりてめて 細大井(乃文也)

○とせきとうけり 細紫上也

○あつゆりゆ返り 万水大井の西返り也

○是やとくろく 細 ことせりるまゝとて文をわかれ
よのゆて紫上(まのくせ)也
○今いつてとくろく 万水 細氏の巾着又似合
との他知也

○は心乃とらし 或抄 姫君のまゝ又ハ明石と
こいしと抄あるらんし

○は心乃の 孟 明石とこいしと抄也

○せめてとくろく 細 紫上又なつかと作也
或抄 細氏の約也

○まことハ 細 細氏の約也姫君とてなれ也

○あつゆりとくろく 或抄 親子れ宿縁は

○とくろくとておめると 或抄 母のいや
とくろくあつゆりとくろく

あつゆりゆ返り 万水大井の西返り也
とせきとうけり 細紫上也
あつゆりゆ返り 万水大井の西返り也
は心乃とらし 或抄 姫君のまゝ又ハ明石と
こいしと抄あるらんし
は心乃の 孟 明石とこいしと抄也
せめてとくろく 細 紫上又なつかと作也
或抄 細氏の約也
まことハ 細 細氏の約也姫君とてなれ也
あつゆりとくろく 或抄 親子れ宿縁は
とくろくとておめると 或抄 母のいや
とくろくあつゆりとくろく

あつゆりゆ返り 万水大井の西返り也
とせきとうけり 細紫上也
あつゆりゆ返り 万水大井の西返り也
は心乃とらし 或抄 姫君のまゝ又ハ明石と
こいしと抄あるらんし
は心乃の 孟 明石とこいしと抄也
せめてとくろく 細 紫上又なつかと作也
或抄 細氏の約也
まことハ 細 細氏の約也姫君とてなれ也
あつゆりとくろく 或抄 親子れ宿縁は
とくろくとておめると 或抄 母のいや
とくろくあつゆりとくろく

○おろし心よ巴抄 紫上の猶子とて也
○おろし心ひ 或抄 紫上の心次オトシ心

○ひらり子河 次生蛭児雖已三歳而脚尚
不立 皇事本紀 明石姫君三歳たると云也
○おろし心いよと哀と云く三とせよと云く
よとせよと 朝總御

○つらふと云 或抄 うちらふと云くといふ
○おろし心ももろと云くつらふと云く花袴着の事

○引ひひたへ 或抄 裳着の腰結とて初
て裳と云くせもろ時腰とひひひひ也紫上
こひひひと云くは也元服の初冠は同
○おろし心ふの花 是は紫上の初也我れおろし
と云くは初と云くは初と云くは初と云くは初
やうなれは初と云くは初と云くは初と云くは初
よと云くは初と云くは初と云くは初と云くは初
るひひひと云くは初と云くは初と云くは初と云くは初

—こころがひらんとてえそつてこころ—
か—とておろしてちまひ心也

○ちまひ心— 細草子地也

○いよせま— 細ほ氏の心也

○ちまひ心— 孟大升也

○月よ二つひし 細前よ有一月毎の十四五
目晦日の念佛さとの目付也
○年乃と云く 花七夕の契りよは立まらや
うるれと云くはねあつぬるよは明石女君ハ
おひる心也 河後撰 天河と云くは
よあつぬと云くは君の出舟ハ年よと云くは
天はと云くはわつる年のもつらと云くは夜
の

おろし心よ巴抄
おろし心ひ
ひらり子河
つらふと云
おろし心ももろ
引ひひたへ
おろし心ふの花
ちまひ心
いよせま
ちまひ心

おろし心よ巴抄
おろし心ひ
ひらり子河
つらふと云
おろし心ももろ
引ひひたへ
おろし心ふの花
ちまひ心
いよせま
ちまひ心



